植物防疫講座

病害編−34
チャ病害の発生生態と防除

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 果樹茶業研究部門
金谷茶業研究拠点 茶業研究領域
山田憲吾（やまだ けんご）

はじめに

チャ（*Camellia sinensis*）はツバキ科ツバキ属の常緑樹で，おもに葉の煎汁を飲料として利用する。中国南部原産で，日本には遅くとも平安時代までに伝わり，全国各地で栽培されるようになった。

我が国でチャに発生する病害として，日本植物病名目録（日本植物病理学会，2020）には35の病名が記載されている（線虫病，生理障害および発生や菌の病原性について検討を要するとされているものを除く）。病原は糸状菌が28と大半を占め，他に細菌が5，藻類が1，病原未確認が1で，ウイルス・ウイロイドによることが確認されている病害はない。発生部位は茎葉部が多く，特に主要病害の多くは開葉期の若い葉にのみ感染する。根部での病害発生は挿し木や新植時に限られ，枝幹部では栽培上問題となる病害はない（園田，2008）。

チャの病害防除は殺菌剤散布によって行われる。農薬以外の防除法はほとんどないが，新芽の収穫や樹形の維持および樹勢の回復を目的とした整剪枝が，結果的に感染部位の除去による耕種的防除となって病害の発生を抑制している。病害抑制を主目的として整剪枝が行われることもある。逆に傷口感染する病害では摘採や整剪枝が発生を助長している面もある。

チャは新芽が年に数回，斉一に生育するように栽培管理されているため，多くの主要な病原菌が感染できる新芽生育期は短い期間に限られており，病害の発生状況はその期間の気象条件によって大きく左右される。それぞれの病害の発生生態にもとづき，茶樹の栽培管理や生育状況と気象条件に合わせて適切に防除を行う必要がある。

I　主要病害の発生生態と防除

1　炭疽病（病原菌：*Discula theae-sinensis*）

我が国におけるチャの最重要病害で，全国的に広く発生が見られる。多くの地域で二番茶期にあたる梅雨期以降に多く発生し，新葉に大型え死病斑を形成する。気候によっては一番茶やその遅れ芽でもまとまった発生が見られることがある。

一般に「炭疽病」は *Colletotrichum* 属菌による病害の病名であるが，チャ炭疽病菌は近年の研究により *Colletotrichum* 属から *Discula* 属に移された（Moriwaki and Sato, 2009）。一方，チャには炭疽病とは別に *Colletotrichum gloeosporioides*（＝*Glomerella cingulata*）による病害があり，「赤葉枯病」の病名が与えられている。海外の文献では *Colletotrichum* 属菌による病害を「anthracnose」としていることがある。また，病徴から見て明らかに *D. theae-sinensis* による炭疽病であると考えられる病害の病原菌を *Colletotrichum* 属菌としている例もあり，注意が必要である。

炭疽病菌は雨滴伝染性で分生子が雨水の飛沫とともに飛散して伝染する。チャの新葉裏面の毛茸とよばれる毛から感染し，10〜14日間の潜伏期間を経て毛茸を中心とした直径0.5 mm程度の赤褐色の小斑点を形成する。しだいに周辺の葉脈が褐変し，葉肉部が色あせて淡緑色となり，やがてえ死して淡褐色〜赤褐色の不定形の大型病斑となる（図−1）。病斑は中央脈と葉縁に囲まれた三角形または四角形となることが多い。病斑上に小黒点状

図−1　炭疽病

Ecology and Control of Tea Diseases.　By Kengo Yamada
（キーワード：チャ，病害，発生生態，防除）